夏色

砂沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏色

【Ｎコード】
Ｎ１３３２Ｄ

【作者名】
砂沙

【あらすじ】
大好きだった人。その人との別れは、あまりにも突然であまりにも残酷で―・・・

夏色＊・・第1章・・＊

君が大好きだったよ。
君のにおいも　温もりも　優しさも　可愛さも
全部だいすきだったよ。
あれからもう3年が経つね―・・・

＊・・1章・・＊

『成美ー！』
いつもの昼休み、いつもの教室。
駆けてくる君。
私の名前は斉藤（さいとう）　成美（なるみ）
高校1年生だ。
そしてさっきから犬のように私にへばりついているのが伊藤（いとう）　和也（かずや）
同じく高校1年生だ。
私達は入学してすぐ恋におちた。
今では誰もが認めるカップルらしい。

『成美っ成美っ今日も一緒に帰ろうなっ』
『どうしたの？いつもそんなこと言わないのに・・』
『今日は絶対一緒に帰りたいんだよぉ』
いつもに増して和也は子犬みたいな顔をして私を抱きしめた。
子どもみたいに無邪気だけど、体はちゃんと男の子で、とても温かい。
そんな和也が大好きだ。
ずーっと・・・一緒にいたいと思っている。

放課後。

校門の前で和也はそわそわとしながら私を待っている。
『和也ー！！』
私は大きく和也に手をふった。
和也はにっこりと笑うとまた、大きくふりかえした。
そして私の手をにぎり、歩き出した。
『成美の手ぇ、いっつも冷たいな。』
『和也の手はいっつもあったかいね。』
『そりゃ夏だもん。あったかいだろ。』
『あれ？ホントだ・・・じゃぁなんでアタシつめたいのかな？』
『心が冷てぇんじゃねぇの？』
『ばかっ』
こんなバカっぽいいつもの会話。なにもないただ幸せな日常。
通り道の土手で、私達はごろんと寝転んだ。
『あっ』
和也が何かを思い出したように起き上がる。
私もつられて起き上がると和也は私に手で目隠しをした。
『・・・？なに・・・？』
『ちょっと目ぇつぶってて。』
和也は目をつぶる私に軽くキスをした。
首になにか冷たい感触がある・・・・
私は目を開け、首元を見た。
すると、シルバーのハートがついたネックレスが首にかかっていた。
『これ・・・・』
『俺、成美のこと大好きだから、なんかあげたくて・・・』
『いきなりすぎる・・・』
いつの間にか涙がこぼれてきた。
『ご・・・ごめっ！？嫌だった？！』
『・・・ううん。うれしくて、泣いてるの。』
後は和也は黙ったままだった。
そして私をゆるく抱きしめた。

普段はうるさい蝉達の声も、うっとぉしい夏の暑さも、
気にならない。幸せだからー・・・

夏色＊・・第2章・・＊

＊・・第2章・・＊

終業式。

明日から夏休みだ。

『夏だねー』

『そうだなー』

相変わらず私と和也はほのぼのライフを満喫している。

『和也ー』

『んー？』

『今度プールいこっか』

『俺明日から旅行だぜー』

『え？！』

私はくるっと和也の方を向いた。

『何処に？？』

『海外。2週間』

『うっそぉ・・・』

少しがっかりだった。2週間も同じ空気すらすえない・・・

寂しそうにしている私に気づいた和也は私の肩を抱いた。

『旅行終わったら毎日会おうぜ。成美とも旅行行きたいなぁ・・・』

『・・・じゃぁ何処行きたいか考えとく。。。』

『そうしてっ』

和也は私の頭をくしゃくしゃとなでた。

『んじゃ、帰るか。』

和也は私の手をにぎり歩きだした。

分かれ道。

『・・・・・』

『どぉしたんだよ？』

『明日だよね・・・』

『まーだ言ってんのかよ！ただの旅行だぜー！しかも2週間だけ！』
『でも寂しいもん。』
駄々をこねだす私の頬に和也が突然キスをした。
『！！！！！！』
『ただの旅行だって！土産買ってくるからよ！』
『―っ！びっくりするじゃんか！』
『ははっ！まぁまた出発する時電話する！』
『早く帰ってきてねー！！』
『おう！！何処行きたいか考えとけよー！』
和也は大きく手をふって去って行った。
和也が見えなくなったので私も家に入った。

次の日。
朝早くから和也から電話があった。
『ふぁーい。。。。』
［あっ！成美！おはよ！］
『和也ぁ・・・？今何処？』
［空港！］
『空港？！』
その言葉に一瞬で目が覚めた。
『まだかけてて大丈夫なの・・？』
［すぐ切らないといけないけど、成美の声聞きたくて。］
『・・・・うれしい。』
［そりゃよかった！っと・・・］
『？』
［もう切るわ！］
『早っ・・・・うん・・・・』
［んなしょんぼりするなって！！］

『うん・・・』
［じゃぁな］
『ばいばい・・・』
［プッ・・・ツー・・・ツー・・］
『2週間かー・・・』
私はため息まじりにそういうとカーテンを開けた。
飛行機雲が見える。
『まだ出発してないだろーなー』
私はぼんやりとそんなことを考えた。

今思えば、もっと、真剣に和也の声を聞くんだった。
なにかあるかもって、感じるんだった。
和也の旅行の前日、ずっと抱きしめておけばよかった・・・

夏色＊・・第3章・・＊

＊・・第3章・・＊

和也が旅行に行って私は暇な日々を送っていた。
友達とのショッピングやプールなども楽しいが、なにより和也に側にいてほしかった。
和也が帰る予定の3日前。
『暇だ・・・』
アイスクリーム店で私がこぼした言葉。
友達＊・町田杏奈（マチダ アンナ）・＊はアイスをなめながらクスクスと笑った。
『私と遊んでるのに、暇とはずいぶん失礼ねー！』
『すいませーん』
私はやる気の無い返事をしながらアイスクリームをなめる。
『でも和也君、あと3日で帰ってくるじゃん』
『そうだけどー・・・』
ちらっとアイスクリーム店の窓を見ると飛行機が飛んでいる。
『2週間って長いねー』
私はのったりとした声で言う。

待ちに待った和也が帰ってくる日。
私は興奮で早くに目が覚め、携帯をにぎりしめた。
帰ってきたらメールをくれるにちがいない。
早く帰ってこないかなー・・・
しかし、和也からのメールは届くことのないまま朝が過ぎ、昼が過ぎ、
夜になる・・・・
『・・・・・あれ？』
私は和也の携帯に電話をした。

［プルルルルル・・・］
［プルルルルル・・・］
［ガチャッ］
『あ！和也！』
［おかけになった電話は、現在電波の届かないところにあるか・・・］
『・・・帰ってないのか・・・・・』
まだ飛行機かな？
その時は思っていた。

次の日。
やっぱり和也から連絡が来ない。
夜になっても・・・・そして電話は

繋がらない―・・・・

家の電話にかけても、誰も出ないのだった・・・

と、その時。
＞プルルルルル・・・・＜
家の電話がなった。
私はどきっとし、受話器を耳につけた。
『もしもし・・・』
［あっ！もしもし？］
杏奈からだった。
『杏奈・・・？どうしたの？』

［テレビ・・・見て。ニュース・・・］
『え・・・？』
［じゃぁね・・・］
『え？！ちょっ・・・杏奈ッ！』
［プッ・・・ツー・・ツー・・・］

私は不思議に思い、テレビのリモコンに手を伸ばした。
テレビで私が見たものは、信じられない光景―・・・

＞昨夜、オーストラリア行きの飛行機でハイジャックが―・・・・＜
・・・ハイジャック・・・？

＞ハイジャックの起きた飛行機は犯人が操縦したまま墜落。
犯人を含め乗客全員が死亡したもようです―・・・＜

・・・違う・・・よね・・・
＞プルルルルルルル・・・＜
また電話がなった。
『はい・・・』
［成美ちゃん？！］
和也のお母さんだ・・・お母さんがいるなら和也も無事だ・・・よかった・・・

『どうしたんですか？』
［飛行機のニュース見た？！］
『はい。今見てました。』
［・・・・・グスッ・・・］
泣いている様子だった。
『あの・・・？和也は・・・？』
［和也はね・・・あの飛行機の中に・・・］

『え?!』

［さっき警察の方から連絡があったの・・・

私、母親が病気で実家に帰ってたから旅行には行かなかったんだけど・・・］

『え・・・』

［ごめんね・・・成美ちゃん・・・ごめんね・・・］

私は何が起きているのかがわからなかった。

夏色＊・・第４章・・＊

＊・・第４章・・＊

嘘だ・・・よね？

でも・・・・和也の母親が泣いてる・・・

うそじゃない・・・

うそじゃないんだ・・・

［グスッ・・・じゃあ・・・また、葬儀の連絡とかするわね。］

『和也の遺体は・・・』

［見つかったみたい・・・今から病院に行って会ってくるわ・・・］

『私も・・・私も行っていいですか？』

［・・・・］

和也の母親は少し黙っていた。

［そうね・・・成美ちゃんには来て欲しいわ・・・］

『はい。』

［じゃあ、T病院にいるから、成美ちゃん来て頂戴・・・］

『はい。』

私はすぐに家をとび出した。

病院に着くと、和也の母親がいた。

涙の後が、くっきりとみえる。

『和也は・・・』

『この部屋よ・・・』

それだけ言うと和也の母親は廊下の椅子に座り込み、また泣いた。

薄暗い部屋に入ると、手前のベットに和也がいた。あまり外傷はないが目を閉じて動かない。

『・・・か・・・ずや・・・？』

私は言葉を失うと同時に涙がこみ上げてきた。
手を触っても、冷たい。
『なんで・・・・いっつも温かかった・・・じゃん・・・・』
『目、開けてよ・・・』
『なんで・・・ハイジャックなんかに巻き込まれるの・・・・』
何を言っても返事がない。

“嘘だよ”って・・・起きてくれないの・・・？
“何成美、騙されてんの？”って、起きて笑ってよ・・・・
『ねぇ・・・・！』

私は和也を揺さぶった。
『なんで・・・・っ　　なんで笑ってくれないのよぉ！！！』
私はその場で泣き崩れ、しゃがみこんだ。

なんで・・・・一人の馬鹿な人間のために・・・
和也が犠牲にならなきゃいけないの・・・・・

いつもの事故のニュースが、こんなに悲しいものだとは知らなかった。
これから秋になって、冬になって・・・

私の手はどんどん冷たくなる。

これから誰に温かさをもとめればいいの・・・・
私はこれからどうすればいいのよ・・・・

『目ぇ開けてよぉ！！！！！和也！！！！！！』
私はまた泣き叫んだ。

夏色＊・・第5章・・＊

私はふらふらと廊下に出ると椅子に座っている和也の母親の隣に腰かけた。
『成美ちゃん・・・・ごめんね・・・』
和也の母親はやつれた顔で私に声をかけた。
『どうして・・・・謝るんですか・・・・』
私はうつむきながら静かに答えた。
『あの子ね、私が実家に戻るから旅行に行かないって言ったら＞俺に行くの変わってよ、成美と連絡もとりたいしくって・・・・・』
『・・・・・・・』
『でもね、お父さんと二人で旅行なんて恥ずかしいし、和也が心配だからって・・・・旅行に行かせた・・・・・・・・・』
和也のお母さんは再び涙をながした。
『和也に任せておけば・・・和也は死なずにすんだのに・・・・私はお父さんと離れずにいれたのにぃ・・・・・』

・・・・・・・ダメだ・・・・・・
なにも考えられない・・・・
だって・・・・2週間前までそばにいて・・・・・
私は首元のネックレスを見た。
『・・・・これくれたの・・・・つい最近じゃん・・・・
なんで・・・・私のことおいて逝くの・・・・・』

＞んなしょんぼりするなって、ただの旅行だぜー？しかも2週間！＜
和也の声がこびりついている。
2週間じゃないじゃん・・・・一生会えないじゃん・・・・
なんで・・・なんで和也が・・・・

許さない・・・・・

私は再び和也のいる病室に行った。

『和也・・・和也は何も悪くないのにね。』
私は和也の手をとった。
『こんなに冷たくなっちゃって・・・・』
また、涙が出てくる。
『な・・・んで・・・あたしの和也・・・返して・・・・』
私は犯人をこの手で殺してやりたいと思った。
『でも・・・犯人まで死んじゃったんだよ・・・・・
ごめんね和也・・・・あたし、何にもしてあげれないよ・・・・・・』

ごめんね和也・・・
ごめんね・・・・

夏色＊・・第6章・・＊

数日が過ぎ、和也のお葬式も終わり、
いつのまにか9月になっていた。
夏休みも終わったが、まだ暑い日が続いていた。

周りはもう和也が亡くなったことに対して落ち着いたようであったが
私の心はまだ落ち着かなかった。

和也の母親も同じようだ。

あれから和也の家の近所では和也の母親が見られなくなってしまったらしい。
大丈夫か・・・・？と思い、私は和也の家に電話をした。

＞ぷるるるるるる・・・・＜

＞ぷるるるるるる・・・・＜

＞現在、留守にしております。御用のかたは・・・＜

出ない・・・・
どうして・・・・？
でかけたとは考えられない・・・
もしかして・・・・・

私の頭には恐ろしい考えが広がっていた。
『でも・・・・電話を取らなかっただけかもしれないし・・・・・』

とにかく私は和也の家に行ってみた。

インターフォンをならしてもなにもなかった。
私は和也の家にはいることにした。
しかし私は和也の家の前でドアにてをかけ、いったんとまった。

いつもならここに手をかけて、少しドアから顔をのぞかせると
ばたばたと上の階から和也がやってくる・・・・・・でも・・・・和
也は・・・・
また涙が出てくる。

でも、今は・・・・
私はぎゅっと目をつむり、ドアをひいた。
この家が変だということはすぐに気付いた。
やっぱり私が思ったとおりなんだ・・・・

和也の家全体を包む臭い・・・・ガス・・・・？
ガスだ。むせるようなガスの臭いが立ち込めている。

すぐに台所に向かうと和也の母親が倒れていた。
『ちょ・・・！おばさん！！！』
私が近寄るとぐったりした様子でかすかに目をあけた。
まだ生きてる・・・
とりあえず窓を開け、ガスの元栓をしめた。

よかった・・・・と、
床に座り込んだ瞬間だった。
目の前が急に真黒になり、あとはなにもわからない。

気づくと病院のベットで寝かされていた。

夏色＊・・第7章・・＊

『成美！』
私が目を覚ましたのと同時に母が抱きついてきた。
『お母・・・さん？』
『成美ね、和也くん家で倒れていたのよ？！』
和也・・・・・・？
『か！和也のお母さんは？！』
『大丈夫。今は違う病室で眠ってるはずよ。』
『どこの病室？！』
『３０５だけど・・・成美、あなたまだ冷静にしないと・・・看護婦さんよんでくるから』
母は病室を出て行った。

数分後。
看護婦に許可をもらい和也の母親のいる病室に言った。
病室に入ると窓際のベットで和也の母親は外を見ていた。
『おばさん？』
『成美ちゃん』
『大丈夫ですか？』
『ええ』
『・・・・・っあの・・・』
＞どうしてあんなことを・・・＜

聞こうと思ったがいざとなると声が出ない。
すると和也の母が口を開いた。
『なんだか、外の空気が吸いたいわね、屋上で話しましょ。』

私は和也の母親に手をひっぱられ屋上に行くことにした。

屋上につくと、フェンスに手をかけ和也の母は話し始めた。
『成美ちゃん、私もうだめだわ』
『・・・・・・え？』
『和也とお父さんがいないと何にもできないのよ。』
『そんなっ・・・でも・・・おばさんは死んじゃだめだと思います。』
『成美ちゃん？』
『だって、だって、おばさんがいやだって思ってた和也がいなくなってからの日々は、和也が過ごしたかった未来だし・・・えっと・・・だから・・おばさんは、和也やおじさんの分まで生きて、楽しまなきゃ・・・・あ・・・・あれ？あたし・・・なに言ってるんでしょう？』
『ううん。それじゃぁちょっとだけ、生きてみようかしら』
『ちょ・・ちょっとじゃないです。ずっと生きて下さい。約束です！』
私は無理やり和也の母の小指をとり、指きりをした。
涙ぐんでた和也の母親は少し微笑んだ。

『成美ちゃん。渡しそびれてたんだけど、これ。』
和也の母は少しすると小さな袋を取り出した。
『和也のポケットから出てきたみたいよ。帰ったらあけてね』
私はこくりとうなずくとそれをポケットに入れた。

退院の許可がようやく出た。
家に帰ると私はさっそく和也の母からもらった袋を開けた。
きれいな袋だけど、ところどころ黒ずんで、破れている。
袋をさかさまにして、手で出てきたものをうけとめた。

涙が出た。

私の手の中には、シンプルな指輪があった。
シルバーで、ハートが規則的に彫られていた。
私は左手の薬指にそれをつけた。窓から射す光に反射してキラキラしてる。
『きれい・・・・』
和也　和也　和也・・・・・
『見てよ・・・すごい綺麗じゃん・・・』
そのあとはただ泣きじゃくった。

その時

＞コンコン＜

『成美！成美！』
お母さんが呼んでる。
『どうしたの？』
私は涙をふきながら答えた。

『それが・・・和也くんのお母さんが！！！！！』

胸がざわめく。

夏色＊・・第8章・・＊

『お母さん？』
『成美・・・和也君のお母さんがね、首吊って死んでたって』

『え・・・？』

嘘・・・・
だって・・・ついこの前まで・・・・しゃべって・・・・
『う・・・嘘・・・だよね？』
『嘘じゃないわ。』

展開がはやすぎて着いていけない・・・・
『や・・・約束したんだよ？』
『約束？』
『和也の分まで、おばさんが生きてあげて下さいって・・・』
『・・・そういえば、はい』
母親から渡されたのは遺書だった
『成美あてだったって。警察の方が。』
それだけいうと、母は私を一瞬だきしめて、部屋を出て行った。
遺書にはペンで丁寧にこう書いてあった。

【成美ちゃんへ
いろいろと私を支えてくれてありがとう
そして和也のことを愛してくれてありがとう
成美ちゃんとの約束、守れそうにありません。

やっぱり私は和也とお父さんがいないとだめです。
最近ろくにご飯も食べる気になりません
たぶんこのまま放っておいても私はストレスと栄養失調なんかで死んでしまうわね
本当にごめんなさい
生きようとしない私が悪いんだから、自分の説得力がないせいで・・・
とか言って自分をせめないでね
私は先に和也のところへ行くわ。
ひとつお願いがあるとしたら
私の骨を一つずつ。小さいのでいいから、
お父さんと和也のお墓に一緒にうめてくれないかしら。
ほんとにいままでありがとう。さよなら】

『・・・・じゃないよ・・・』
涙が出てくる。
『さよならじゃないよぉぉぉ・・・』
涙が遺書に落ちて、だんだんと紙がくしゃくしゃになってくる。
『おばさん・・・約束守ってよ・・・』
ただ、泣くしかできなかった。

おばさんを焼いた日。
私は親戚の方全員に遺書を見せ、了解をもらい、小さな箱に喉の小さな骨を2つ入れた。
そのまま私は制服で和也とおじさんのお墓に行った。
まずはおじさんのお墓を少しほり、おばさんの骨をいれた。

次は和也のところだ・・・・
おじさんのところでは出なかった涙があふれてくる。
『か・・・ずや・・・・ごめん・・・・ごめんねぇ・・・・』
私は土をほり、おばさんのお骨を入れると手を合わせた。
『なんにもできなかったよ・・・・おばさん・・・止めれなかったよ・・・』
ごめん　ごめん　ごめん　ごめん　ごめん
私も死んじゃおうかな・・・・
死んじゃえば・・・・楽になるかな？　和也と会えるかな・・・・

そして私は家に帰ると眠りについた。

目が覚めると、体がふわふわしていた・・・
向こうの方にひとがいる。

和也だ。

＞和也！＜
＞成美！＜

和也と私は抱き合った。
和也が抱きしめてくれる・・・
もうずっとこうしてたい・・・
でも、そんなささやかな私の願いはかなうはずなかった。
＞あ・・・成美・・・おれ・・・もう行かないと・・・＜
＞？！＜
＞ごめん＜
＞嫌だ！！嫌だよぉ！！＜

＞成美・・＜
＞あたしも・・・あたしも一緒に連れてって・・・・一人ぼっちになるのは嫌だよぉ・・・＜
＞成美・・・＜
和也はいきなり私の唇にそっとキスをした。
＞成美は連れていかない。でも俺、ずっと成美のコト見てるから。＜
和也が泣いてる・・・・久々の和也の顔は少し大人っぽくて、ドキドキした。
私がぽーっとしていると、和也は消えてしまった。
それと同時に、私は目を覚ました。

夢・・・・だったんだ・・・・

そうだ・・・私・・・・生きなきゃ。

生きなきゃ・・・・

夏色＊・・第9章・・＊

次の日
学校に行った私に杏奈がすぐかけよってきた。
『成美?！大丈夫なの?！』
杏奈は気を使いながら、でも一生懸命に私に声をかけた。

杏奈は決して言わない。
『かわいそうに』だとか『元気出して』なんかの言葉を。
他の人はそういったありきたりな言葉で私をてきとうになぐさめ、
どこかに行ってしまう。
杏奈は人を慰めるのが上手だ。
何も言ってくれなくても、一緒に泣いてくれる。

そして毎回杏奈は言うのだ。

『何にもできなくてごめんね。』

どんな慰めよりも心が落ち着く。
私はその言葉を聞くたびに、涙を拭いて、また前に行ける。
杏奈は大事な存在だ・・・って思ってる。

そんな私たちにクリスマスが来た。
皆クリスマスモードで、カレカノなんかで何処かにいくのだろうけど
私は恋をしない。

まだ和也に恋をしたまんまだった。

高校に入って初めての
クリスマス・・・・

本当なら隣に和也がいて、
『どこいきたい？』といつものようにじゃれてきたのだろう。

私は１２月２４日、一人で家を飛び出した。
近くの１００円ショップで買った小さなツリーを持ち、
左手の薬指には和也の最後の贈り物がひかっている。

私が行ったのは和也のお墓。
墓石の隣にツリーを置き、手を合わせる。

『初めての・・・・クリスマスだね』
・・・・・・
『この前、夢に和也が出てきたよ。久々に会えてとってもうれしかった』
・・・・・・
『この指輪、すっごく気に入ってるんだぁ・・・』
・・・・・・

何を話しても、何を言っても、和也は返事をしない。
冷たく　静かな時間だけが通り過ぎるだけ

『やっぱり・・・・さみしい・・・・』
枯れたと思い込んでいた私の涙は一つ。またひとつ。大きな粒となってほほをつたる。

『あたし・・・・和也がいないと・・・・なんにもできないよぉ・・・・』
私はしゃがみこんで、泣きじゃくった。

もどってくるはずがない。
どんなに泣いても　どんなにさけんでも　もとめても

和也は二度ともどってこないんだ。
あの笑顔も　頬も　唇も　声さえも
あの夏色の空と共に消えてしまう。

私もいつか忘れちゃうの？
そんなの嫌だよ・・・・・・
嫌だよ・・・・・・・・・・

『・・・・んで・・・・？』
私の心に残ったものは、ただハイジャックの犯人を責める気持ちと
和也の消えないぬくもり。

あの日旅行に行かなければ和也は今ここにいたかもしれない。
寒いねーって言う私を抱きしめてあったためてくれたかもしれない。

旅行の日にちが少し遅かったら。
帰る日にちが早かったら。

どんどんと浮かび上がる
【もしそうだったら和也は・・・】
という考え。

どうにもならないとわかりつつも

私の頭はそれしか考えられない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1332d/

夏色

2011年1月4日14時43分発行